

今回は新聞研究会を訪問し、研究会の四号館の部屋は敷きつめられた「サ」のしごんがうす高く積まれており、泊り込み体制完備。

同研究会は部員約三〇名の小サークル。現在そのほとんどで新聞研闘争会議を結成し闘争を主体的に担っている。

「われわれは学内支配系体が社会構造に完全に組み込まれているこの現状から、自己否定の論理にのって、サークル解体—文連解体—明大解体—反大学の構築という方向性を志向しているのです」とはA君の語。従って既に同研究会の組織的図式は解体されたとのこと。だからキャンパスにもいなし、会員登録もない。異色のサークルである。反大学構想も相違なく、ついでついでと具体化するといふ。

サークルは解体 新聞研究会

研究会の基本的な考え方。それ故、中立を認らう。ミの裏面の歴史を讀みとるためにサークル闘争の歴史を讀みとるためにサークル闘争は物取り闘争であった」と総括。学生の本の自治による、学館の獲得を目指している。さらに「明大全体をわれわれのイメージする学館に変えていきます」とA君は強調し、安楽について「安楽が日本の政治的経済的バック・ボーンになっている以上、これを粉砕する時は当然の結果として、『革命』になるでしょう」と閉言した。

新聞の中立性などというものはありえない。つまり階級社会がある限り、両方の階級に立脚した中立の新聞などはできない—というのが同

